

聖心女子大学
2026 年度 大学院（人文社会科学研究科）9 月期入試
解答と講評

<英語英文学専攻 修士課程>

○専門科目試験

【解答】

問 I. (解答例)

(1)

(2)

※ 著作物の使用部分については、著作権の関係により掲載できません

問 II. (解答例)

(1)

(2)

※ 著作物の使用部分については、著作権の関係により掲載できません

【講評】

問 I.

- (1) F・スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』の有名な書き出し。語り手が若い頃に父にもらった忠告を回想しつつ、人生を振り返っています。
- (2) “a habit”が直前の「あらゆる決めつけを控える傾向」を指すことに注意してください。

問 II.

- (1) 「待ち合わせのかたち」は直訳せず、“the way people meet up”などと柔軟に言い換えてください。
- (2) 「待つとはなしに」の英語表現は、いったん日本語でのやさしい言い換えを考えるとよいでしょう。

問 III.

(英文学) 英米文学を中心とした作家・作品、文学的テーマ、文学用語の知識と理解を確認する問題。短い項目は、重要なポイントに焦点を絞って書きましょう。長い項目については、説明すべき内容を大きく分類し、全体の構成を考えた上で書くとよいでしょう。重要なポイントについては、具体例を用いて説明することも大切です。

(現代社会とジャーナリズム) 現代の社会問題、メディア、ジャーナリズムの基本用語・概念の知識と理解を確認する問題。項目の書き方は「英文学」の説明と同様ですが、特

に実際の事例に基づく論述が大切です。日頃から時事問題への関心を高めておくとうよいでしょう。

<日本語日本文学専攻 修士課程>

○専門科目試験

【出題意図】

修士課程において専門的な研究課題に取り組む際には、その課題に直接関わる分野の知識はもちろんのこと、1つの分野に偏ることのない、隣接分野についての広範な知識が求められます。当該試験科目は、本学修士課程日本語日本文学専攻における4つの分野（日本古典文学・日本近現代文学・日本語学・日本語教育学）について、それぞれの分野における基本的な事柄の説明を求めるものです。

4分野15問のうちから、2分野以上にわたって5問を自由に選択させ、それに解答させることで、受験生が複数分野についての基本的な知識を有しているかを測ります。日本古典文学・日本近現代文学の分野に関しては、基本的な作品・作者・専門用語・ジャンルなどを文学史・文化史の流れの中で適切に理解しているかを問います。日本語学・日本語教育学の分野に関しては、専門用語をそれに該当する具体的な言語現象・社会現象と併せて正確に理解しているかを問います。

また、修士課程で課される修士論文作成に必要なアカデミックスタイルの文章を書く能力を有しているかを測ります。そのため、すべての問は論述式で解答することを求めます。

【評価時の観点】

すべての解答において、次の5点を評価の観点とします。

- ①当該分野の基本的な事柄を正確に説明しているか。
- ②適切な固有名・具体例を示しながら、論理的に説明しているか。
- ③文章表現が一定の水準に達し、わかりやすい文章で書いているか。
- ④その問に解答する論述として、過不足なく適した分量の文字数で説明しているか。
- ⑤誤字・脱字、単語の誤用などの表記上または表現上の誤りはないか。

○外国語試験（英語）

志願者がいなかったため、実施なし。

<哲学専攻 修士課程>

○専門科目試験

【出題意図】

哲学専攻に関連する複数の設問のなかから受験者が一問選択し、それについて日本語で論述する形式です。哲学専攻修士課程で専門的・学術的研究を遂行するために必要な論理的思考力および日本語の表現力を確認するとともに、修士論文を執筆する際に求められる基礎的な知識や学術的作法を身に着けているかどうかを確認します。具体的には、選択した設問に関係する概念を正確に把握しているか、その概念の学術上の位置づけを理解しているか、設問に関係する学術的議論や学術的潮流をふまえているかを確認しつつ、受験者が作法に則りながらも柔軟に、論理的かつ説得的に問いについて論じることを求めています。

○外国語試験（英語）

【出題意図】

哲学専攻に関連する英語の文章を読み、内容を正しく把握し、日本語で適切に表現できるかどうかを問う問題です。哲学専攻修士課程で学修するために必要な英語の文法の知識と語彙力を確認するとともに、文脈のなかで各単語の語義を正確にとらえ、適切な訳語を選び、論旨を損なうことなく日本語で要約できるかどうかを確認しています。

○外国語試験（フランス語、ドイツ語）

志願者がいなかったため、実施なし。

<史学専攻 修士課程>

志願者がいなかったため、専門科目試験（日本史、東洋史、西洋史）、外国語試験（英語、ドイツ語、フランス語）いずれも実施なし。

<社会文化学専攻 人間関係研究領域 博士前期課程>

○専門科目試験

【出題意図】

社会学：I-1～5では社会学と社会調査の基礎的な学術用語の説明を求めました。II-1,2は修士論文の計画とその社会学の理論との関連および学術的意義についての論述を求めました。

文化人類学：文化人類学の専門科目試験の問Iは、文化人類学用語について説明を求めました。文化人類学の教科書等に頻出する基礎的な学術用語です。受験生が極少であったために試験結果の講評は避けますが、現代社会を映し出す様々な現象を人間と文化の視点から質問しました。問IIは、修士論文の計画とその社会学の理論との関連および学術的意義についての論述を求めました。

○外国語試験（英語）

【出題意図】

2024 年末、日本の伝統的酒造りがユネスコ無形文化遺産に登録されましたが、日本語訳を求めた社会文化学専攻（人間関係研究領域）の英語問題文は女性の杜氏（とうじ、酒造りの責任者）についての新聞記事を扱いました。女性は従来、月経のために不浄とされ神聖な酒蔵から排除されてきたという説、また女性は日本酒造りの重労働を担えないという説があり男性に占められてきました。しかし、女性杜氏は少しずつ増え、日本の杜氏協会には 33 人が登録しています。問題文では、「力仕事」が機械化によって軽減され、女性杜氏が参入しやすくなった経緯や酒造りの歴史が述べられると同時に、女性もまた情熱を持って日本酒造りを細やかに行う手順について書かれています。出題の意図として、日本の伝統文化の一側面を丁寧な日本語で説明できるかを問いました。

<社会文化学専攻 比較文化研究領域 博士前期課程>

○専門科目試験

【出題意図】

全 4 問を出題し、そのうち 2 問は小論述、2 問は用語説明です。用語説明は、比較文化領域での研究を進める際に、あらゆる専門的な概念用語を表面的かつ安易に扱うことなく、一般的定義や学術的議論をふまえて理解した上で意味を持たせて用いることができるかどうかを判断するために重視しています。小論記述問題においても、複数のキーワードを示してそれらを記述中に用いることを課しています。そのような出題の意図とは、ヒントともなるキーワードの用途を抽象論だけに終始させず、既に持ち合わせる情報、すなわち研究の基礎となる具体的な専門知識と組み合わせることで抽象と具象の両面を論理的な文章構成で論じることができるかどうかを見ることにあります。

○外国語試験（英語）

【出題意図】

“Oppenheimer Shelved in Japan”と題する 744 語の英文の全訳を課しました。題材の内容は、「原爆の父」と呼ばれたオッペンハイマーの、原爆開発に関わる米国映画『オッペンハイマー』が世界各国で公開される中、日本では半年以上公開が遅れたことをめぐる関係者の証言と論考です。原爆が日本に実際に投下された事実の歴史的評価をめぐっては、多数意見としては米国と日本では大きな隔たりがあると言われており、この議論を比較文化領域で扱うにふさわしいものであるとして題材に選んでいます。評価の際には、単なる英語の単語力、文法力を見るだけでなく、全体の文脈から適訳を類推する能力を判定しました。出題を部分訳ではなく全訳としたことには、そのような意図があります。

<人間科学専攻 教育研究領域 博士前期課程>

志願者がいなかったため、専門科目試験、外国語試験（英語）いずれも実施なし。

<人間科学専攻 視聴覚情報研究領域 博士前期課程>

志願者がいなかったため、専門科目試験、外国語試験（英語）いずれも実施なし。

<人間科学専攻 発達心理学研究領域 博士前期課程>

志願者がいなかったため、専門科目試験、外国語試験（英語）いずれも実施なし。

<人間科学専攻 臨床心理学研究領域 博士前期課程>

○専門科目

【解答と評価の観点】

問題1（解答例）

- (1) 弁別閾とは、感覚において検出可能な最小の刺激量の差異・変化量であり、相対閾や丁度可知差異と呼ばれることもある。比較刺激の量を変化させ、標準刺激との差異の有無を判断させた場合に、50%の確率で差異を検出できるときの刺激量の差分として測定される。標準刺激の一定の範囲内で、弁別閾は標準刺激の量に比例して大きくなることが知られており、「ウェーバーの法則」と呼ばれる。
- (2) 半構造化面接は、構造化面接と非構造化面接の中間にあたるもので、質問項目や質問の順番は決まっているが、協力者の反応に応じて追加質問や追加情報を得るためのプロンプトを加えることができる柔軟性をもっている。構造化の程度によって、構造化面接に近いものから非構造化面接に近いものもある。査定や診断のために用いられることが多く、実施には訓練が必要とされる。
- (3) エンパワメントとは、個人や集団が自ら意思決定し、状況を改善できる力を獲得していく過程を指す概念である。これは単に外部から力を与えるのではなく、本人が自信や自己効力感を高め、周囲の支援や制度を活用しながら主体的に行動できる状態になることを含む。例えば、支援者が一方的に助けるのではなく、相談者が自分で選択肢を考え判断できるように援助するケースは、エンパワメントの実践例といえる。
- (4) 系統的脱感作法とは、不安や恐怖を引き起こす刺激に対し、段階的に慣らししていくことで反応を弱める行動療法の一つである。まずリラクゼーション法を習得し、その後、不安の小さい刺激から順にイメージさせ、リラクセス反応と恐怖反応を結びつきに

くくすることを目指す。例えば、高所恐怖症の人が「高い場所を写真で見る→階段の上立つ→展望台に行く」と段階を踏みながら練習し、不安を軽減していく方法が典型例である。

問題2（評価の観点）

(1) 情動制御という概念の説明だけでなく、情動制御の発達の様相を説明できるかを確認した。以下のような論点が含まれているかを評価した。

- ・乳幼児期から思春期・青年期まで、あるいは老年期までの発達
- ・脳科学の知見
- ・縦断研究による知見
- ・愛着やモデリングなど、発達に関わる機序

(2) 以下のような点について説明されているかを評価した。また、文章構成が明瞭で論理的か、誤字脱字がないか等の形式的な面も評価のポイントとした。

- ・検査の目的の把握
- ・検査の選択、実施順や日程について
- ・子どもへの検査の説明・導入の仕方、信頼関係の形成
- ・実施場面での具体的な配慮、記録の仕方
- ・実施後の子どもへの対応 等

【出題意図】

問題1は、心理学用語の知識を正しく保持し、適切に説明できる能力について評価するために作成されました。

問題2では、同様に論理的思考能力について評価するとともに、それぞれの設問において次のような出題意図がありました。

(1) 適切な情動制御（感情制御）が心理社会的適応と関係していることが、近年の縦断研究で明らかになっており、脳科学における知見からも、情動制御の発達やそれを支える要因への注目が増加している。概念の説明と一般的な発達の变化について説明できるかを問う意図で出題したが、より幅広く、臨床的な観点から情動制御の問題について述べる場合も評価の対象に含めた。

(2) 心理臨床のさまざまな領域で、学齢期の子どもを対象に知能検査を実施する機会が多い。子どもに対して知能検査を実施する際に必要な準備、求められる姿勢や具体的な配慮など、実践的な理解ができているかを確認する。

○外国語試験（英語）

【解答と評価の観点】

問題1

問1 (解答例)

- (1)
- (2)
- (3)

※ 著作物の使用部分については、著作権の関係により掲載できません

問2 (解答例)

霊長類学者のフランス・ドゥ・ヴァールの提唱した、共感の発達や進化のプロセスに関するモデル。共感現象はロシア人形(マトリョーシカ)、あるいは玉ねぎのように幾重もの層から成り、その中核には情動の伝染がある。そして、これが他の認知的・感情的なスキルと結びつき活性化することで、外側に存在するより複雑な共感現象の層(例えば「同情」や「向社会的行動」など)を形成する。

問題2

問1 (解答例)

- (1)
- (2)
- (3)

※ 著作物の使用部分については、著作権の関係により掲載できません

問2 (解答例)

境界は、心理臨床の治療的枠組みとして、心理臨床家とクライアント双方の役割を明確にする機能を持つ。適切に適用することで、心理臨床家は倫理を守りながら、クライアント自身の最大の利益に適った支援をすることができる。

境界は固定的なものではなく、状況によって適切なあり方が異なる。境界の種類には様々なものがあるが、ある行為が治療的に有益な場合もあれば、逆に害をもたらす場合もある。適切か不適切か、倫理的か非倫理的かも状況によって変わる。また、臨床家が複数の役割や義務を持っている場合は、その適用は一層複雑となる。

このように考えると境界は、ただ守るべき決まりではなく、状況に応じて判断しながら調整する枠組みである。心理臨床家は境界の意味を理解したうえで、そのあり方に敏感

になり、クライアントの背景や関係性に配慮しながら、慎重かつ柔軟に運営していくことが求められる。

【出題意図】

発達・認知、および、臨床の領域に分けて、2つの英文資料をもとに、それぞれ英文和訳3問と論述問題とを作成しました。文献の選択および問題の作成においては、それぞれ以下の点を考慮しました。

問題1は、全体として、乳幼児期の感情の発達において押さえておくべき基礎的なトピックである「情動伝染」について、受験生が理解できているかどうかを確かめるために、この問題を選択した。問1の和訳問題については、主語と動詞の把握がやや難しく、また専門用語の用いられている文章の和訳を課し、文章の構造の理解を確かめるとともに、心理学で用いられる基礎的単語の習得の度合い（例えば、acousticを「音響的」と訳せるかどうか、など）を確かめた。問2では、下線部以降の1パラグラフにわたって説明されている共感のロシア人形モデルの説明をわかりやすく要約できるかどうか、ならびに、共感の発達や進化について近年注目されている「ロシア人形モデル」について理解しているかを問うた。文意を適切に把握し過不足なく要約できるかどうかに加え、そこに自身の知識を盛り込まれているか確かめた。

問題2は、心理臨床を行う上で基本的な事項である境界についての文章を用いることで、受験生の英語力と理解力を確かめることを意図していた。問1の和訳問題については、文章の中でも基本的なことを述べている箇所を、その構造ならびに意味の理解を確かめた。問2については、文章全体の内容把握ができているかどうかということに加え、そこから境界についてどう考えるかを問うことで、心理臨床についての受験生の考えや姿勢も確認した。この考えや姿勢は、受験生によって多くの考え方があったが、採点においては、文章の内容を踏まえてどの程度論理的に考え解答されているかを重視した。